

京都磁器発展策（奨励会）（九、一三、大阪時事新報所載）

京都の製陶界にては旧型の墨守を廢し時勢に適應して大いに斯界に新機軸を出す所あらんと目録見にて今回九鬼男爵初め大森知事、中沢博士、内貴、西村（治兵衛）雨森、藤江の諸氏主唱となりて奨励会を京都市五条坂陶磁器試験場内に設置した。その特色とする所は春秋二期斯道の技芸家より新作品の出品を求め、これを陳列して有志者の観覧に供し優等品を購入し特に鑑秀なる者へは賞与を行い以て斯業の発展を期するにある。

会長は九鬼隆一（男爵）幹事は中沢岩太、雨森菊太郎、錦光山宗兵衛、松風嘉定、藤江永孝の五氏で、十一月中旬、岡崎町美術協会で第一回を開催す。

明治四十一年三月京都陶磁器奨励会の記事は次のようである。

第八回奨励会

総出点数は一五五、総出品人数一〇五、受賞者は総計四八名であつた。

第八節 京都府の業績

明治三年 勸業場（河原町二条下ル旧山口藩邸）内に舎密局仮局を設ける。

明治十一年 独人、ワグネルを招き、化学工業品の製作即ち、陶磁、七宝、磁瑯、玻璃、工業薬品等の製造を指導せしめた。

明治四年—十三年 産業振興策のため、毎年博覧会を開催した。

明治五年—以降 物産引立總会社が五年以後物産引立会社となつて一事業会社として発足するや、同社の事業の一として、相楽郡童仙房開拓地に移住窮民授産のため、同地で陶器の製造を行はしめた。

明治二十年 府費を支出して、陶磁器、織物、染物、機械製作等について留学生をフランスに派遣した。

第三篇 大正篇

第一章 本邦陶磁器業界の推移

大正時代の業界を概観すると、初期では日露戦役後の好影響をうけて、内需、外需とも好調を続け、機械利用の工場も各地に続出し、活況のうちに経過している。

大正三年、第一次世界大戦勃発して、諸外国の資材品の輸入禁止や船舶の欠乏などのため、輸出面では一時不況時代に入つたが、大戦の長期化するに及んで、市場は次第に品うすとなり、注文は急激に増加し、価格も漸騰して、瀬戸、美濃地方の輸出陶業は黄金時代となり、我国陶磁業界は世界的に確乎とした地位を確保するに至つた。

註、米国は従来、我が国、陶磁器の最大輸出市場であつたが、ドイツ品との間に激甚な競争が続けられていた。世界大戦開戦後は、日本の独占状態となり、輸出額は急増した。

又従来のファンシー、グッズに代つて、改良食器が多くなり、戦後には南洋方面の輸出も増大し、又、タイル、セラコッタ等の製造や高压磚子、衛生陶器、工業用耐酸坩堝の製造も急進をみせている。

このうち、化学用磁器では、蒸発皿や埴塼などは、我国でもドイツ品が輸入されていたが、戦後東京の工業試験所、京都の松風工業会社等で製造され、米国へも輸出されるようになった。これもドイツ品にかわつて、進出したもので、又とない好機をとらえたものである。

大戦前後の我国陶磁器の生産及輸出額は、大戦初期の大正四年では生産額一、七〇〇万円、輸出額七〇〇万円であつたが、大戦景氣の最盛期である七年では、生産額四、四〇〇万円、輸出額二、三〇〇万円に上昇している。

註、同年の窯業生産額二億円中、セメント四、五〇〇万円、ついで陶磁器四、四〇〇百万円、硝子四、二〇〇万円等があげられ、窯業輸出額四、〇〇〇万円中、陶磁器埴塼は四五%、硝子三〇%、セメント一三%で陶磁器・埴塼が首位をしめている。

又、大正七年の国内陶磁器の生産高順位は、愛知が一、九八〇万円で首位を示し、これについて岐阜、佐賀、京都、石川、兵庫、三重、愛媛、長崎、滋賀の順となっている。

大正年間の陶磁器国内生産高及び輸出高は次表の通りである。

年次	国内生産高	輸出高
大正元年	一、六五五万円	五四五万円
二	一、七六八	六六四
三	一、五五六	五九一
四	一、七五三	六九五
五	二、五二二	一、二〇四
六	二、九三四	一、四四七
七	四、四二一	一、九九六
八	六、四六六	二、二六三
九	六、二八四	三、一四五
一〇	五、四〇六	二、〇七九
一一	六、〇四九	二、一二一
一二	五、四七四	二、三四六
一三	六、八五三	二、五四四
一四	七、八一八	三、五二七

(農商務商統計による)

この期間には次のようなことがある。

1 水金問題

大戦の影響と、陶磁器の需要激増により、国内産の水金のみでは輸出陶磁器の絵付も困難となり、全国的問題となつたが、全国の業界及び関係者が運動して、我国の金塊を輸出して、米国の水金をプール輸入し、漸く需要に応ずることができた。

2 トンネル窯の採用

大正二年、日本陶器株式会社で、ドイツ式のマイヤー式絵付けトンネル窯を築いた。

大正九年、小倉の東洋陶器株式会社で、ドレスラー式トンネル窯を採用して本焼に成功した。これは斯界に一新紀元を画したものといえる。
又、大正十四年には電気利用の絵付け窯が名古屋地方で使用され始めた。

3 陶歯の製造

大正七年松風工業株式会社で我国最初の陶歯の製造に成功した。
要するに大正年代においては、世界大戦の影響により、海外市場は、従来の輸出国であつた、ドイツ・イギリス・フランス・オーストリー等にかわり、我国陶磁器の進出めざましく、洋食器、磚子、衛生陶器、化学磁器において、技術改良、製産設備の増大等により、著しい発展を示した。又特筆すべきは、岐阜県の磁器が急速に進歩し、内地向食器は遂次京焼に接近し、佐賀・石川地方も、それぞれ改良、進歩したところである。

第二章 京都陶磁器業界の概要

第一次世界大戦を契機とする全国的需要の増大に影響されて、京都でも、大手の松風工業、高山耕山工場等もその基礎を確立し、又栗田、五条、清水の狭隘、市街地、風致地区としての制限等より、新たに日吉町、泉涌寺地区への移転開窯を見るなど生産規模を拡大し、経営状況も漸く近代資本主義の影響をうけはじめた。

このため大正期は僅か十五年であつたが、その後の業界に一転期を画することとなる過渡的世代として重要な意義を有するといえよう。

生産と貿易

大正初年は明治より引続き盛況を見せ、大正二年の府下陶磁器生産額は、市内一四一万五千円、郡部三五万八千円計一七七万三千円であり、その中で郡部生産額の九八％は紀伊郡であつた。又同年の京都陶磁器輸出額は六九万九千円(直接輸出一万一千円、商社を通じたもの六四万九千円、ホテル其他での店頭販売三万九千円)で、その輸出先は、米、英、仏、独、濠、伊、中国、ブラジル、トルコ、露国の順であつた。

註、京都府誌によれば

1 同年の輸出額の他に、伊万里、九谷焼等を京都から約二万円輸出している。

2 京都市の同年度海外輸出品は合計で四五二万円その中、陶磁器は刺繍の八七万円について、六九万円と第二位を占め、以下絹織物五九万円、扇子、团扇四七万円がつづいている。

大正三年頃から明治以来輸出の大部分であつた錦光山を中心とする金彩の粟田焼に伍して、畑与一商店、同六年頃から佐治商店により、初めて清水焼の染付磁器や仁清、乾山風の陶器が、朝鮮、満州、台湾、中国、南洋方面に輸移出され、大正七年には墨貫入水裂釉、彩画陶器、古染付の磁器、そば釉の花器、食器、置物等が米国、香港、東南アジア、中国、満州等に輸移出されている。

大正中期に至つて、第一次世界大戦の終熄とともに、忽ち不況が見舞い、大正七年の京都市の陶器輸出額は二八万六千円に減少し、同九年は、輸出額のみ持直したが、その後の財界変動とともに再び不況となり、市内職工数も、同八年の二四三〇名から同九年にはその約二割を減少している。同九年五月八日の報知新聞は、

京都の陶器業者五百軒休業

京都市陶器業者五百軒は財界不況のため、協議の結果二、三日間休業する事となり、職工等は賃金二割減にて使用されたと要求したるものを拒絶され寄々善後策協議中、と記載している。

続いて大正十二年には関東大震災の影響もあり、需要の伸びがあつて再び市内の生産額は四三〇万円に上昇している。この間特筆すべきは清水、五条を中心とする磁器の生産であるが、その中でも日用及び割烹食器の伸長は大きく、大正三年頃迄はその産額も僅少であつたが、その後大正七、八年迄の好況時には飛躍的に需要増加するに及んで創業する者も増加し、設備も拡張され、日吉、泉涌寺地区の盛業とともに、五条、清水地区の今日の基礎もこのときに築かれた面が多い。

日吉、泉涌寺地区の開業

このような情勢下に、大正二、三年頃の輸出不振による影響を受けた愛知、岐阜、石川及九州等より職工及び一部業者の京都流入となり、粟田、五条清水の狭隘と相まつて、大正二年日吉地区、大正五年泉涌寺地区の開業が始まり、京焼に大きな変動をもたらし、この地区では日用品、工業用品の製造がはじめられた。詳細は後述する。

労働問題

第一次大戦の好況を契機として資本主義の興隆期に入るや陶磁器業界でも、製造業主と従業員との対立が見られ労働問題が改めて、注目されるようになった。

特に伝統を重視する当時の京都の業界は労資関係が多分に封建的であり、労働者の地位も惨めであつたが、大戦後の物価高騰に際し、全国的に擡頭した労資間の対立が、この業界にも波及し、労働者の自覚による最初の本格的ストライキが行われ待遇改善を要求するに至つたのである。

即ち大正十二年には新興地域であつた日吉町を中心に、賃金値上げの全面的総罷業が行われ、爾後数年にわたり、工場主と従業員の斗争が繰りかえされたが、その間に従業員の待遇も徐々に改善され、生活様式の合理化も行われた。(労働問題の項参照)

その他

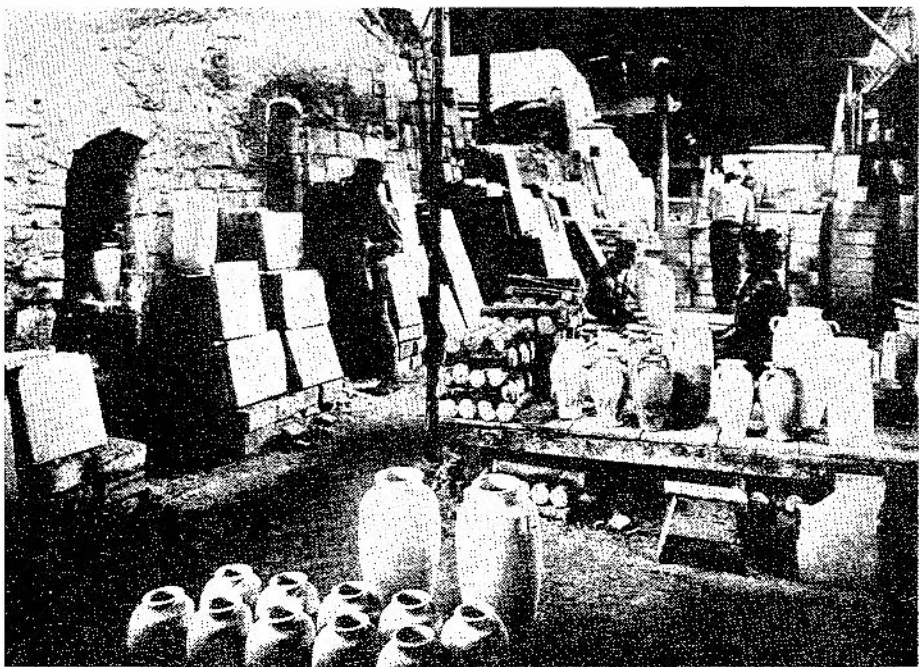
大正六年、伊東陶山と諏訪蘇山が帝室技芸員に推挙された。

同年、松風系の事業として経営していた金沢市の日本硬質陶器会社が釜山に朝鮮硬質陶器会社を設立した。

同年十二月、松風陶器合資会社は松風工業株式会社に組織を変更した。

大正七年、高山工場が高山化学陶器株式会社を設立した。

大正八年、市立陶磁器試験場は、国立陶磁器試験所(農商務省所管)に移譲昇格した。初代場長、工学博士、植田豊橘。



大正4年 京都粟田焼工場の一部 (京都陶磁器合資会社工場)

その他、市立陶磁器試験場においては、素地青磁の創作、磁器艶消釉の調整、白高麗磁の製作、石膏試験の完成、中国産呉須代用品の発明等あり、大きな成果をあげている。

又、大正初期には、大阪高工出身の小森忍、東京高工出身の河井寛次郎、浜田庄司等が市立陶磁器試験場に来て、研究と訓育を受け、河井寛次郎は京都で浜田庄司は益子で活躍をはじめ、新進作家として河村蜻山の名があげられた。同九年には清水六兵衛（四代）が歿している。

以上概況を述べたが、その中の主要事項については次章に述べることとする。

第三章 業界事情

第一節 日吉町、泉涌寺地区の発展

1 日吉町の開窯と発展

明治末から大正の初期にかけて、栗田焼の隆盛と共に、他地方から技術習得のため或は京都への事業場の移転等により、京都に移住、進出するものが多くなり、従来の栗田、五条清水地区は、風致地区、住宅区域に指定され、且つ狭隘となつたので、これら他地方からの進出者を中心として、一部、東山線沿いの、道路拡張による立退きを余儀なくされるものをも含め、新しい土地の開拓を要請されることとなつた。

大正二年、東山の蛇ヶ谷の丘陵地帯は、未開の草深い竹藪の荒地であり、智積院の南に、日吉病院（避病院）があるのみで、勿論、今の東海道線の東山トンネルもなく、鉄道はずつと南方の稲荷、桃山を経て、山科の勧修寺地区を通つて大津にぬけていた時であつたが、西仁太松が率先、この蛇ヶ谷の地に築窯した。これが現在の日吉町陶業の創始である。これより、福田松斎（二代）若林与三松、加藤煤鳳、吉川作松、平野善四郎等が相ついで工場を建設し、大正七、八年には居住者も一〇〇戸以上となり、陶窯十二、素焼窯四〇、ロクロ、二〇〇台をこえる盛況となり、日吉町の陶業は、今次第二次大戦の終るまで、この十二基を中心に、動いている。

日吉町は前述のように、各地からの進出者を主とし、新鮮な息吹きがあり、創業当時は製品の大半は栗田焼風のものであつた。又五条坂の延長のようでありながら、五条、清水地区の、伝統的、美術品を中心とする保守的経営方針に対して、ここでは経営面、製造面共、新鮮さと自由さが

あり、日用品、工業用品を中心として発達し、今日の蛇ヶ谷の特殊形態と、特色を築きあげたのである。

又、第一次欧州大戦後の好況時代には、半磁器の隆盛期であつたので、生産の八割近くは、半磁器、磁器によつて占められ、栗田土物は次第に減少する傾向を辿っている。

欧州大戦中の好況も、四日市製品の進出と、不況の影響を受け、大正九年五月には、不況の極に達し、十六日間、ろくろに封印して作業を停止している。この地区は、京都においても比較的工場形態の大きいところで、工員の数も多く、大正十年には、日吉地区従業員組合が結成され、同十四年夏の、京焼全般の労働争議は、その中心が日吉地区であり、二十数日間に亘つて労資の斗争がくり上げられた。

しかしてこの大争議を契機として、加藤吉郎工場では京都最初の電動装置による機械ろくろが採用され、又登窯の改良（第五、六室まで磁器焼成可能となる）、成型の機械化等が、この地区を中心として行われていった。

この地区の明治四十五年及び現在までの開窯要図は別掲のとおりであるが、先に述べたとおりこの地区では、京都の各地区と比較しても工場形態を形成した比較規模の大きいものが多く、企業者総数では、五条地区、泉涌寺地区に比して最少であるが、その生産額は常に最高位を保持し（昭和三十年調査）、「新清水」と称せられている。

2 泉涌寺の開窯と発展

清水、五条から日吉地区へ移窯し始めたのは大正二年であつたが、つづいて大正五年には泉涌寺附近一帯が京都の有力な陶磁器製造地区としての本格的進出を見るようになった。

この地は古くから窯業とは深い縁があり、天正十四年、豊臣秀吉が大仏殿を造営するに当つて、遠路運搬の不便をさけるため、この附近に瓦窯を築いて製造させ、山中山城守を奉行として管理させて以来、製瓦業が盛んになり、この附近の土と、優秀な技術が評価されて「大仏瓦師」として名声を博してきた。大正初年にはこの業者は、大仏殿附近から泉涌寺方面に亘つて、二十八軒あり、この中、泉涌寺東林町附近には十軒余が蝟集していたといわれる。

島村久三郎は、京都の伝統的陶芸家、永楽善五郎の築窯師であつたが、永楽家より資本を借り、大正五年、東林町附近に開窯した。島村は貸窯を主とし、この窯を利用した立焼業者には杉崎竹治郎、内藤福三郎、島田与三郎、田中重太郎（和物製造）野村源次郎、馬場崎駒吉（瓶口）等が

あつた。同七年、中西嘉平の開窯前後には既にこの地区の登り窯は、七、八基を数えたといわれ、この二、三年に急速な発展をとげたものである。

なお、この間、泉山了谷（愛知県多治見出身で、旧姓、梶田、通名高木茂）は元、栗田の丹山、錦光山に学び、明治三十二、三年頃、陳列所を東山通渋谷角に、又、明治三十七、八年頃には登り窯を泉涌寺附近に築き、その作品は中国陶器の写を主として、辰砂釉の研究を重ねて、泉山焼で売り、興正寺門跡に愛せられて、泉山了谷の作家号をおくられたが、明治四十四年頃北海道に渡り、同地で新たに発見された陶土を利用して耐火煉瓦の製造を主とする陶器会社を設立したといわれている。

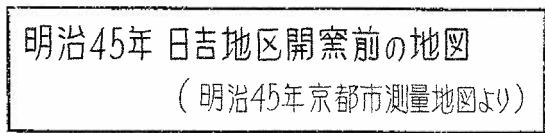
又、泉涌寺開窯当初の製品は、日吉地区の事情と殆んど同じであり、やはり栗田焼の好調を移して、生産額の約三割を占め、磁器及び半磁器、其他で残りを占めていた。欧州大戦時の好況時には、（大正七、八年）半磁器の生産が盛んになり、業者もこれに力を注いだが、四日市製品に圧迫されて、再び陶器、磁器に移行した。（この間、栗田陶器は次第に衰微していった）

又この地区の企業は、開窯当初の貸窯を中心として発展したため、日吉地区に比較して、小企業が多く、十人以上の従業員をもった工場は四五であり他は家内工業者で、いわゆる家族労働者を中心としていた。（大正八年当地区の登り窯八基、営業者約二十戸）。

こうして、泉涌寺地区は、遂年発展していくのであるが、この地区も、日吉地区と同じように、各地からの移住者（当初の窯持は、主として、五条、栗田地区より移転し、従業員は、東濃、会津方面の出身者が多かった）が多く、新開地としての清新の気風と、開拓精神に燃えていたもので、従業員も、労働者意識に徹し、大正中期より末年にかけて、労働問題が頻発している。即ち、この地区には、前述の瓦焼業者が大正十三年頃には約十業者を数えていたが、この年、瓦焼業界に波及した労働争議は、約二カ年に亘つて、その斗争を繰り返し、業界の不況も手伝つて、その中の二、三は陶磁器に転換し、他は操業を止めて、伝統のあつた瓦焼も殆んど絶滅していった。更に、この地区も、大正十四年夏の京焼業界の争議には、深刻な斗争を起しているが、この結果、労働問題、雇傭問題の認識を高める反面、従業員の自立傾向一さきに述べた貸窯中心地区であつたこともその一因であるが―を強めており、登り窯は大正末期、十三基で、増加の少いのと比較して、立焼業者は約四十戸に増加し、全般的に見ると、労働争議の度に、企業の零細化を招いているというのは、皮肉な現象であるとともに、京焼業界の宿命といわれる小企業形態を伝承したことにについては深く考えて見る必要がある。

要するに、泉涌寺地区は、明治及び大正初年の京焼の急発展に対応して開拓され、欧州大戦による好況を受けて、今日の発展の基礎を固めたも

要するに、泉涌寺地区は、明治及び大正初年の京焼の急発展に対応して開拓され、欧州大戦による好況を受けて、今日の発展の基礎を固めたも



日吉地区窯業分布図

昭和36年12月

凡 例

..... 大正時代の築窯
 戦後の築窯
 アラビア数字は築窯順を示す。

... 登り窯
 ... 単 窯
 ... トンネル窯



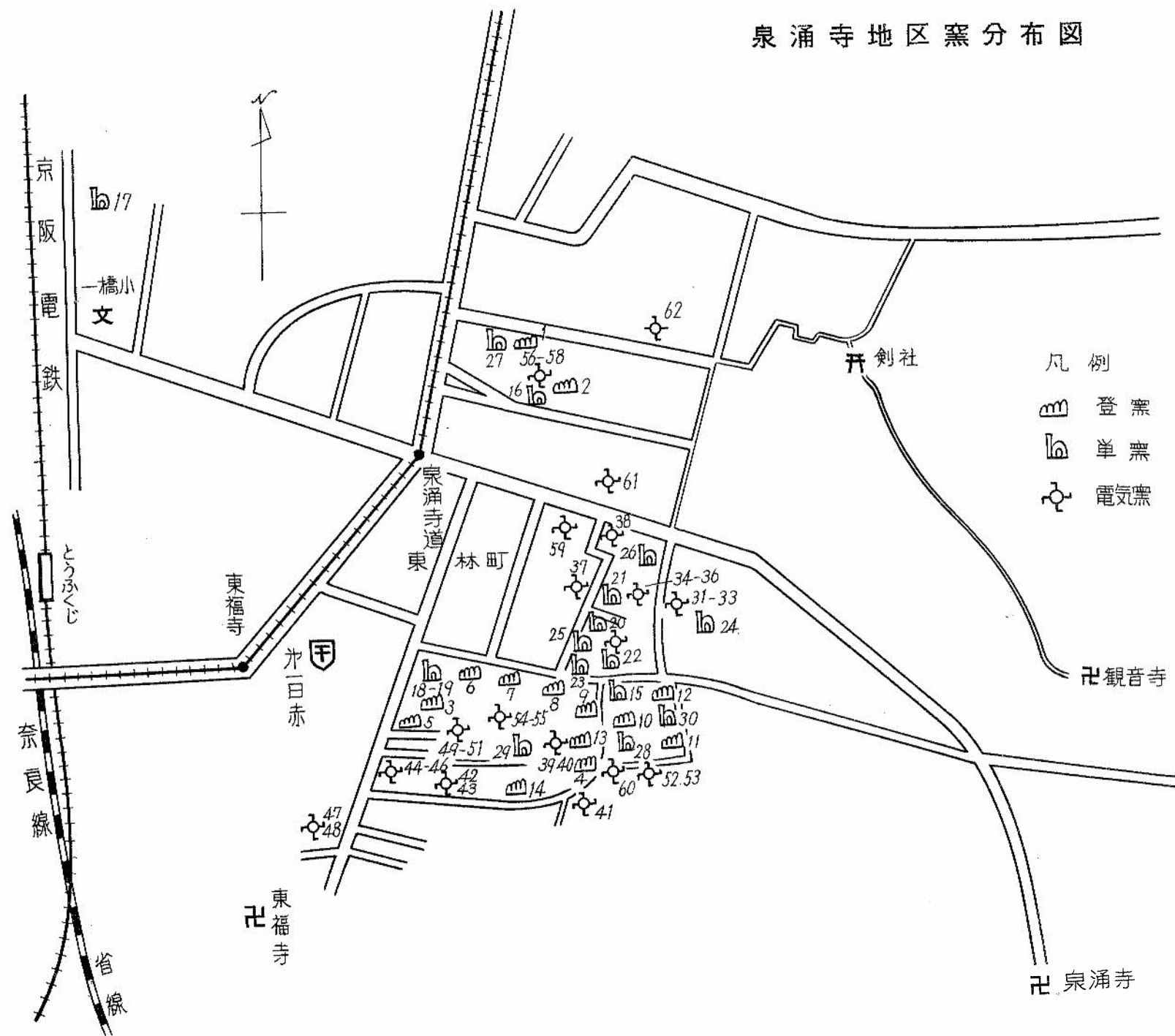
築 窯 者	現所有者
1. 西仁 太松(東の窯)	山崎 忠作
2. 福田 松齊(2代)	福田 松齊
3. 若林与三松	若林 重造
4. 加藤 吉郎	加藤 吉郎
5. 吉川 作松	古川増太郎
6. 佐藤 松山	若林 政吉
7. 山本 龍山	松本 清隆

築 窯 者	現所有者
8. 川瀬 白鳳	陶 友 会
9. 山川 勇作	松本 翠(平地窯2)
10. 中村 東洗	土谷菊次郎
11. 西仁 太松(西の窯)	橋本七太郎
12. 宮本与三松(平地窯)	馬場 信孝
13. 加藤 由吉	加藤 由吉
14. 角田 喜蔵	魔 窯

築 窯 者	現所有者
15. 北村小太郎	小山数一郎(平地窯)
16. 勝野 春一	勝野 葵次
17. 高島 隆司	高島 隆司(平地窯)
18. 馬場 信孝	馬場 信孝(")
19. 井上 幸一	井上 幸一
20. 土谷菊次郎	土谷菊次郎
21. 高島 敏秋	高島 敏秋

築 窯 者	現所有者
23. 高島 隆司	高島 隆司(平地窯)
24. 加藤 由吉	加藤 由吉(重油窯)
25. 水野 良平	水野 良平(平地窯2)
26. 福田 松齊	福田 松齊(平地窯)
27. 水野 定一	水野 定一(平地窯)
28. 川尻 七平	川尻 七平(平地窯2)
29. 浅井 国造	浅井 国造(トンネル窯)
30. 加藤 錦春	加藤 錦春(平地窯)

泉涌寺地区窯分布図



- 登 窯
1. 前田佐一 祥月陶苑
 2. 小川由雄
 3. 陶栄窯
 4. 伊藤銀蔵
 5. 京風、加藤秀一
 6. 月輪製陶 (有)
 7. 陶友窯
 8. 陶立協組
 9. 牧野楽堂
 10. 熊本与三吉
 11. 熊本工業所
 12. 平野窯
 13. 窯仲会
 14. 陶葬製陶所

- 凡 例
- 登 窯
- 単 窯
- 電気窯
15. 石炭窯(単窯)
 16. 岩崎為次
 17. 小川由雄
 18. 西出浅次郎
 19. 小林製陶所
 20. 光陶苑(株)
 21. 内田邦夫
 22. 森奥弘
 23. 熊本工業所
 24. 前田五雲
 25. 加古製陶所
 26. 北村正太郎
 27. 前田政一
 28. 日昇陶器(株)
 29. 林電磁器(株)
 30. 馬場先外志彦

- 電 気 窯
- 31~33 武岡清太郎
 - 34~36 光陶苑(株)
 37. 池田曉山
 38. 宮下善寿
 - 39~40 清水政雄
 41. 岡山卓家
 - 42~43 富田栄次郎
 - 44~46 奥田卯之助
 - 47~48 仙石幸清
 - 49~51 今橋善和
 - 52~53 加藤永峯
 - 54~55 奥山善和
 - 56~58 小川由雄
 59. 寺 尾
 60. 横山義雄
 61. 天野達夫
 62. 万代正一

泉涌寺区外(伏見)

登窯 平塚王堂

" 宮永東山

電気窯(2)平塚王堂

" 安田友彦

のとみることができる。

第二節 共同窯、貸窯の普及と伏窯の出現

明治より引続き、大正七年頃までの好況は、陶磁器需要の増大をもたらし、ひいて、日用品量産が全国的傾向を示すに至り、愛知、岐阜方面では早くも、トンネル窯使用が問題化する段階に入つたが、京都でも、需要増加に伴い、登り窯の大型化が必要となつてきた。他面、登り窯室数の増加により、各室によつて焼成する製品の種類、品質を異にする必要があるが、家内工業的生産規模の下にあつては、一業者で大量に、又多種類の製品を準備することが困難で、相互にこの不足を補足するため共同焼成が考えられるようになった。こうして、窯の共同使用と貸窯の普及をみることとなつたのである。

共同窯はその文字の如く、二、三或は四、五の製造工場が共同して窯を使用する制度で、製品の種類により或は工場の区別によつて窯詰をなし焼成を共にするものである。窯焚夫は一種の独立した職業となつていて、一窯何程という請負制で窯を焚くので工場主はこれに委託する形態をとつた。

貸し窯は窯の持主が一式、二室と製造者に窯を貸すもので、又小工場へは立貸しと言つて一立(棚板一枚をつみ上げて一立として貸し賃を定める)。若干ということで簡単に賃借ができるのである。焼成は専門の窯焚夫が引受けることは前述と同様である。

この制度は、京都の陶磁器業界の、当面の生産を増大することには役立ったが、原料専門工場の設立と併行して、大正二、三年では創業資金、五〇円から六〇円位で、生産ができることとなり、小資本経営の可能性を与え、又その結果として、職工、徒弟の独立創業を促進し、益々小規模経営の傾向を助長し、その後の業界の発展を遅らした一つの原因ともなつている。

伏窯の出現

製造業者と問屋間に、特約販売の制として、伏窯の制度が現われはじめたのは、大正十二、三年の頃といわれている。

この制度は、製造業者と問屋の間において製品の一手販売の特約を結ぶことで、窯を伏せる、という。

その方法には主として、つぎの二方法があり、その中比較的「ロ」の契約が多かつたようである。

イ 問屋が製造業者と一切の製品につき、無制限に一手販売の特約を結ぶ。

ロ 一切の製品につき、一定の数量又は、時期を定めて一手販売の特約を結ぶ。

これは、陶磁器は季節により、需要の増減が甚だしく、問屋側よりすると、需要期に当つては、製造業者が家内工業的生産様式であるため、供給が充分に受けられず、他面、製造業者は、小資本経営者が多く、有力問屋の確実な注文を確保して一般の繁、閑時を問わず、製造と販売を確実にすることが必要であること等のため、この双方の利益を計り、又優秀技術者の製品を独占し、値崩しを除去する等の利点を得るため考えられたのがこの制度であつた。

第三節 試験研究、教育養成機関

1 京都市立陶磁器試験場の国立移管

明治時代において述べた如く、京都市立陶磁器試験場は、その設立以来、我国唯一の陶磁器試験場として大いに業界に貢献してきたのであるが、更にこの試験場を、より権威あらしめ、より内容の充実を期するためには、国立に移管し、一層の飛躍を期すべしとの意見が盛んになり、錦光山宗兵衛、松風嘉定、藤江永孝場長市選出の中安信三郎代議士等が中心となり、猛運動を試ろみ、明治四十四年、第二十七回帝国議会において、衆議院議員、阪本金弥他六議員から、農商務省直轄とすべき建議案を、衆議院に提出、遂に採択された。この国立移管運動に対しては、名古屋市の猛然な反対運動が展開され、最後に京都に決定したものであるが、その後一向実現せられず、大正七年、京都市は国立移管の請願書を、時の、仲小路農商務大臣に提出し、又、化学工業調査会、大日本窯業協会等からも、国立窯業試験所設置の建白書を出さしめ、農商務省を慫慂した。この間の事情につき大正六年九月号の大日本窯業協会雑誌三〇一号につきのような記事がある。

陶試国立問題（京都日の出新聞）

京都市に於ては屢報の如く現在の市立陶磁器試験場は作業工場等に狹隘を感じ、不便尠からざるより近く本年度中に於て追加予算を請求し元、日吉病院跡市有地に移転せんと計画ありて当局に於ても五条坂附近関係業者の意嚮を探りつつあつたが最近農商務省に於ては東京、大阪両工業試験場と共に京都の陶磁器試験場をも之を国立になさんとの意嚮あり、此程、植田場長、石川助役並びに松風嘉定、錦光山宗兵衛氏等は農

商務省側の意見をきくべく東上し大臣・局長及び藏川書記官並びに国立賛成論者たる武井貴族院議員と親しく会見の上相互に意見を交換帰洛した……

以上のような努力の結果、遂に第四十一議會で予算の決定を見、同八年四月五日、勅令第八十三号をもつて、陶磁器試験所設置官制が公布され、当分の間その事務は京都市立陶磁器試験場で取扱うこととなつた。京都市は、敷地五〇〇〇坪、機械、器具、参考図書類を政府に提供し、同九年十二月、下京区（現在東山区）本町十九丁目に、庁舎の新築を完了して、ここに移転した。

註、この間大正四年初代場長藤江永孝逝去、工学博士、植田豊橋が後任となつた。

この業界待望の国立試験所は、前述の通り業界一般の結束と、当時の先覚者の多大な、負担、努力により、名古屋市との猛烈な競争を排除して、京都に設けられたものであり、京都業界発展の原動力として、期待されたにもかかわらず、昭和二十七年、名古屋工業技術試験所の一部に、移転、廃止されたことは返す返すも、残念なことといわねばならない。

2 京都市陶磁器講習所

さきに明治四十四年来業界の子弟養成のため、京都市立、陶磁器試験場の事業の一部として、京都陶磁器試験場附属伝習所が設けられてあつた。これは業者の子弟を始め一般青少年に陶器製造の技術を教え次代の陶業家を養成すべき目的である。

ついで大正九年一月京都市立陶磁器試験場が国立に移管されたので、同伝習所は試験場より離れて独立し、京都市立陶磁器講習所と改称し、同年七月、東山通五条上る梅林町旧試験場跡に移転した。大正十五年三月にいたり、同所を閉鎖し、試験検定事業及びゼーゲル氏三角錐製造は、京都市立工業研究所へ、教育事業は、京都市立第二工業学校へ移管された。

大正九年八月十三日、日の出新聞所載陶磁器伝習所の記事を抜粋する。

京都市陶磁器伝習所（大正九年八月十三日日出新聞）

国立陶磁器試験所は本年一月十五日京都市立陶磁器試験場より独立し、深草に土工全部を終り目下建築に従事し十一月開場の予定であるが、京都市立陶磁器伝習所は従来の陶磁器試験場全部を使用し十二日新所長に、市技師、大須賀真藏氏を任命し、十年度に国立陶磁器試験所の北手に総坪千八百坪中に約九百三十四坪の建物を建てるといつて……

3 京都市立工業研究所窯業部

京都市立陶磁器試験場が国立に移管され、植田豊橘博士も所長として同所に移った。其時徒弟養成を目的として伝統を持った伝習所は残つて京都市立陶磁器講習所と改称され五条の試験場跡にそのまま残り、大須賀真藏が所長として就任したことは前述した。京都市立工業研究所は大正九年に設立京都駅の南側九条に建築を始め同十二年完成（同年九月の関東大震災にはほぼ完成していた）同年秋竣工式を盛大に挙行し、初代所長仲井俊雄は同年四月に就任、万事を指揮した。

大正十五年工業研究所に窯業部が新設され前述の大須賀真藏が部長となり講習所も窯業部に属することとなつた。窯業部は元五条の市立陶磁器試験場の工場をそのまま踏襲して事業をつづけた。

昭和九年大風害があつて五条の窯業部も九条の工業研究所内に移転し、ゼーゲル三角錐の製造をも兼ねて業界の指導と研究を進めた。

仲井所長は昭和十七年四月退任後猪飼所長を経て森田所長、次いで吉本所長となつた。

4 工業学校窯業科

京都市立第一工業学校に新しく窯業科が新設（大正年代）され五条の工業研究所窯業部に併立することとなつたが後第二工業学校が新設されたので第一工業学校の窯業科を第二工業に移し、伏見の新建設校舎内で授業を始めた。教師として小川新一郎、高野忠等が在職した。

第四節 近代工場組織へ

1 松風工業株式会社

従来の松風陶器合資会社はその組織を変更して、大正七年一月、松風工業株式会社として、合資会社時代の事業を継承するとともに新しい事業を採り入れ順調に経過した。その主要な事業と、株式組織に変更後の事業拡張の概要はつぎの通りである。

○主要事業

- (1) 電気用磁器製造
- (2) 化学陶器製造

(3) 輸出向陶器製造

(4) 電気用其他の諸機械及材料の売買

(5) 陶器原料、材料及び燃料の採掘、製造並びに売買

(6) 計器類、電気用器、一般絶縁物の製造

○事業の拡張

(1) 師団街道松風橋に第二工場の新設。

工場長、橋本佑造の下に、化学陶器全般の製造を始めた。主要製品は、大形蒸発皿、ビーカー、パイロメーター。るつぽ。キャセロール等であつた。

(2) 大谷炭坑

福岡県嘉穂郡で大谷炭坑を経営した。

其他、名古屋市白壁町に名古屋支店を設け、林取締役を支店長として、輸出向陶磁器絵付一切（石版転写応用を主とする。）の製造を行った。（合資会社時代のものを継承）

松風工業株式会社の詳細は、大正時代をも含めて、明治篇で記述したので、ここには、この程度で止める。

2 松風陶器製造株式会社

これまで、わが国で使用されてきた高級陶器は全部、米、独方面より輸入してきたものであるが、大正四年、松風工業株式会社社長松風嘉定は、予て陶磁器試験場長藤江永孝より窯業の一部門に陶器製造の有望なことを聞いていたので渡米を機に米国の陶器製造工場を視察し、又当時ニューヨークに陶器技工所を開いて斯業界に好評を得ていた荒木紀男を尋ねて其意見を聞き、シカゴに貿易商を営んでいた名古屋の瀧藤治三郎とも会つて荒木に帰朝をすすめ、大正八年から松風工業株式会社第二工場内に陶器研究所を設け、荒木がアメリカで体得した陶器製造を基礎に研究を始め、化学的方面には工学博士北村弥一郎が協力し、歯牙の形態に関しては医学博士小野寅之助が日本人の歯牙の特性について参与協力し、我国民の口腔に適する陶器を完成した。当研究所では、陶器のみに止まらず、歯科医の使用する材料一切に亘り研究をすすめ、ゴム材料、合金材料、埋

没材々料等々の齒科材料の研究達成につとめた。これ等に就ては技師宮津一に負う処が少くなかつた。

こうして、大正十一年、資本金百万円をもつて、松風陶歯製造株式会社が設立され、松風嘉定社長となり、松風憲二が実際の事務を司つた。技師長は前記荒木紀男であつた。製品は逐年改良が加えられ、わが国齒科界の大きな発達のもとを築き、更に外国にも輸出されるようになった。この会社こそ、日本最初の高級陶歯の製造工場であり、京都業界の誇りとするところである。

3 越山製陶株式会社

大正七年合資会社越山製陶所を継承して、資本金一〇万円（二分の一払込）で設立され、本社を京都市東山区大和大路通り五条下ル東入芳野町に有し、木村宇之助を社長とする同族会社で、平野耕輔によつてイタリアの技術を導入した。マジョリカ焼の、額皿ペン皿、ブックエンド、及び置物並びに一部家庭用食器を製造し、越山マジョリカ焼の名で業界に知られた。

同八年、当時勃興した建築業界のタイルの需要増大に呼応して鳥羽街道深草に第二工場を建設し、浮洲武彦技師を招聘して建築用白色タイルの製造を始めた。その工場の規模は次の通りであつた。

工場敷地面積	約二千坪
工場建物面積	約五百坪
機械設備	一式
焼成窯（石炭焼成倒焰式角窯）	四基
フリット窯	一基
百尺煙突（赤煉瓦造）	二基

製造数量は一カ月二十万個余で、当時有名であつた不二見タイル、佐治タイル、淡陶タイル等の一流業者と競つて名を挙げ、その製品の一部は中国（上海方面）へも輸出された。

この会社は不幸にして適当な後継者がなく後日廃業の止むを得ない状況になつたが、伝統と、工芸的作品を重んずる京都の窯業界にあつて、量産体系による建築用品の生産に踏切つたことは特筆に値するものと思われる。

第五節 原料製造工業の発展

陶磁器生産に必須の陶土は地元での産出は非常に僅少で、多年、天草、出石、瀬戸、岐阜、滋賀（信楽）伊賀等の遠隔地からの供給に頼つてきたのであるが、規模の小さい工業形態では思ふような、原料の入手、調整が困難であり又、量より質を重視する京都の特殊性と相まつて、原料専門業者の出現を要望されていたが、明治四十三年金岩原料店を改組して日本陶料会社が設立されたのをはじめとして、第一次大戦の好況時に原料製造工場は急激に増加して、大正十五年にはその数十一となつた。

このような原料製造専門工場の多数出現したのは、京都の生産様式の一つの特色といえることで、他の窯業地―瀬戸、多治見、土岐、有田、信楽等―では、陶磁器製造工場自体が原料土を有して坯土（生地土）の精製、調整を行つてゐるのと比較して、京都の小規模経営組織が因をなしてゐる、又これらの原料工場が、更に小企業の増設を誘致したともいえる。

大正十五年京都の原料製造工場の主なものは

日本陶料株式会社（明治篇に記載）

長谷川陶料店

日本陶磁器会社

等であつた。

第六節 労働事情

大正年代に入り、労働者意識の拡大と、一般労働運動の進展につれ、当業界でも新興陶業地の発展と相俟ち、特にその不況時には、労働者議を誘発している。この業界の争議の特徴は、既述したように、その経営形態の殆んどが小企業であるため、一企業体のみでの争議は見受けられず、いづれも各地区別、又は、京都市内陶磁器製造業を統括した争議となつて出現し、労資共、横の連繫と団結をもつて対抗したもので、労働者側の支援団体も、他業種から応援、指導を仰いでいたのである。

このうち、大正十二年には、新興陶業地として、進歩的企業体の多かつた日吉地区を中心として争議がおこつた。このときは、第一次大戦後の

不況の嵐の中に、経営者側は、賃金値下げを提示し、労働者側はこれに対抗して立上つたものであるが、労働者の団結は不充分で、僅か三日で経営者の要求を容れて解決した。

大正十三年、岡崎の市公会堂で、京都陶磁器工組合が結成された。これは前年の争議に敗北をした労働者が、これに刺戟されて、より強固な団結を図るため、京都の労働者の団体であつた友愛会の指導の下に、組合を結成したもので、この組合の斗士の中には、現在、有力陶磁器製造業主としてその温厚をうたわれ、社会党、民主社会党、共産党の京都有力幹部として勇名をはせ、あるいはすでに物故して、二代目が、代表的事業を掌る等、何れも感慨深い人などのあるのも興味が持たれる。

ついで大正十三年四月、松風工業に労働争議起り、一ヶ月間労資対峙し、工場には工員等籠城して作業した。此の時代ではかなりの大争議であつた。

大正十四年の初夏打続く不況のため、資本家側は商工組合を通じて、全地区に対し、一律賃金三割値下を提案した。組合は前年結成した団体の試金石として、その斗争本部を、三島神社（渋谷通上馬町）におき、友愛会や岡崎の奥村電気労働組合の奥村甚之助等の支援を受け、組合員は陶器の行商販売を行つて資金獲得につとめ、爾来約二ヶ月に亘り、強力な争議態勢をもつて対抗した。

資本家側は、当時、京都で勢力のあつた俠客に仲介を依頼し、その俠客の交渉を受けた労働者側も、結局、一割五分の賃下げを承諾して、日吉神社で手打式という大時代的な方法でこの争議も解決した。

この争議に参加した組合員は約四百名であつた。

註、この争議中は、俠客を中にはさんで、短刀、槍等も時に渦中に入り、又争議解決といへば、手打式にふさわしく、日吉神社には四斗標が三本も用意され、双方シャン／＼と手をしめて、解決されたという。

第七節 その他

1 大日本窯業協会京都支部設立

大正十年一月十六日、窯業協会の京都支部が岡崎公会堂で結成され、同協会初の支部として発足した。

支部長 北村彌一郎

顧問 中沢岩太（工博）、植田豊橘（工博）、錦光山宗兵衛、松風嘉定

評議員 橋本佑造、細木松之介、河井寛次郎、河村半次郎、吉岡藤作、中沢良夫、浮洲武彦、福田直一、小西龍太郎、耕山愛太郎、酒

見元治、木村彌一郎、宮永東山、清水六兵衛、重富英、平岡利兵衛、杉崎竹三郎

幹事 海福紀一、藤岡幸二、大須賀真藏

この日は発会式を兼ねて講演会及び懇親会が催された。講師は松風嘉定、芝田理八、北村弥一郎、の三氏で、関係者百余名出席盛大な懇親会であつた。

2 時習園（大正9、11、20京都日ノ出新聞）

中沢岩太博士指導の下に陶磁に遊陶園、漆器に京漆園、染織に道楽園の三園があつたが、新芸術を研究する作家団体の内、青年作家を集めて時習園を組織した。会員は、陶器では、伊東義治、浮田泰徳、池田泰山、小川文斉、井本米泉、浅見震藏等

尚霜島正三郎、福田直一両氏は製作と凡ての相談に應ずる事となりたり。

3 京都陶磁器奨励会（大正11・11大日本窯業会雑誌）

京都陶磁器商工同業組合奨励会の略称で、全組合員を会員とし、事務所を市立陶磁器講習所内に置き、総裁府知事、会長錦光山宗兵衛、総務部長松風嘉定で、その事業は、

意匠部 部長清水六兵衛、技師菊地左馬太郎で京焼に適合する図案の作成及募集、参考品購入展覧

競技部 部長平岡利兵衛、職工競技会、奨陶会、指定作品及び図案応用作品展覧会、古名器展覧会、講話会

研究部 部長中川忠次郎、京焼と他地方製品との比較研究等

原料調査部 部長耕山愛太郎

技術部 部長川勝太三郎、技師海福紀一

地方視察部 部長酒見外次

会 計 部 部長谷口長次郎

京都陶磁器奨励会展覧会の批評（大正9、12、11読売新聞）

大正九年十一月十五、六日 京 都 市 公 会 堂

大正九年十二月七—十二日 大 阪 高 島 屋

“ “ 十七—二十一日 東 京 高 島 屋

錦光山宗兵衛、松風嘉定氏等を首脳とする京都陶磁器奨励会成立後第一の試みとしての会席食器組物作品競技会は、作家五十余名が研究の結果として飯茶碗、小紋物碗、向附、刺身皿、醬油皿、五寸皿の六品を取合せた七十五組の何れも秋を課題にしたものだが、六兵衛、陶山、東山、萬珠堂、清水等の作は流石に渋くて重みもあり面白く、泰山、松韻堂、楽々堂なども夫々自家の色を発揮し、中には数名の合作もある。値段は十人前が五十円から五百円近くまで。

○同 批評（大正9、12、9大阪毎日新聞）

食器六種を秋と云う課題に統一配合される所に豊かな芸術味が流れて見た目に頗る快よい。大体皆秋という感じは色濃く現れているけれどもそれは菊とか、紅葉、月、雁などから受ける秋の感じで、慾をいえば一目見て受けるパットした感じよりも清楚にして寂しみの勝つたものをより多く見たかつた……。又秋の感じを出すに急なるの余り向附が大きな栗の形であつたりするのは些か因はれたといわねばならない……。

4 泰 平 窯（泰平居）

大正年代の中期より市立陶磁器試験場の菊地左馬太郎、福田直一、杉崎竹次郎等の陶案絵画関係の人々が集り、一種の陶磁研究会を作り、これを泰平居と称して月一、二回の会合を行い、作品は主にこれに加藤溪山の青磁窯で焼いて芦屋に住んでいた辻常吉が取扱つておつた。

又、辻は豊則運送店主と合同して「タイル」の製造販売を志し、池田泰山の技術と提携して泰平タイルとして売り始めたが、泰山とのあいだがうまく行かず、タイルを断念し三河の瓦屋と組み、又越前に瓦窯を築いて、タイルの製造販売に専念したとのことである。

泰平居或は泰平窯の箔書き、直一の書銘のある青磁の作品は今も辻家に多く残っている。

第四篇 現代篇